



科学教育NPO

学生が主体となり科学教育を行うNPO「Science Station」が話題を呼んでいる。このNPOの狙いや設立の経緯について、理事長の吉井讓教授（理学系研究科・天文学教育研究センター長と、学生として理事を務める藤原英明さん（理・4年）に話を聞いた。

Science Station

tionは今年の3月、東大を中心とした教官・学生有志により発足した。その大元は、木曾観測所が98年から行っている「銀河学校」というセミナーだった。高校生数十名が観測所に泊り込み、天体観測から解析、



吉井 讓 (理学系研究科・天文学教育研究センター所長)



藤原 英明 (理学部4年)

増えすぎ、対応しきれないほど」と吉井教授は嬉しい悲鳴をあげる。講義にとどまらず、科学博物館などの運営への協力やジュニア・セッション（日本天文学会主催の高校生による研究発表会）に参加する高校生への旅費の補助など、活動は広範囲にわたる。天文学以外からも物理、化学など多分野の学生の参加が増えており、広く科学全般の魅力

を伝えていけるという。このNPOの設立動機には、科学の教育普及を通じて「理科離れ」を止める意図がある、と吉井教授は説明する。「現場の声を聞いていると、一般に言われる

らうのです」（藤原さん）このNPOの最大の特徴は、講義などの活動を学部・院生が行っている点だ。「法人化の流れの中で大学教員は、人員を削減されながら社会貢献も強化しなければならぬという厳しい状況にあります。中学生に

も、時間的にも体力的にも難しいのが現状です。その点、学生は生徒と世代が近いので楽しみながら教えることができるという利点があります。そしてまた、常に若い人が参加することで組織としての新陳代謝もうまくいきます」と、理事長としてNPOの運営面での支援やアドバイスを行っている吉井教授は説明する。学生主体という形式をとることで、長期的な活動の継続も期待できるといふ。

学生自身もまた、教育活動を通して様々なことを学ぶ。「ある授業で、『十年後、先生は何をされていますか』と生徒に質問され、答えに窮したことがあります。自分の研究に閉じこもりがちな学生時代に学外で教育に携われるこの活動は、教えることの難しさを知り、さらには自分自身を見つめ直すよい機会にもなります。研究との両立は確かに楽ではありませんが、もっと多くの学生に参加してほしいですね。連絡を待っています」（藤原さん）

「ナマ」の科学の 厳しさも伝える

連絡は理事長の吉井教授 (04222-3415002) まで。

(服部長祐)